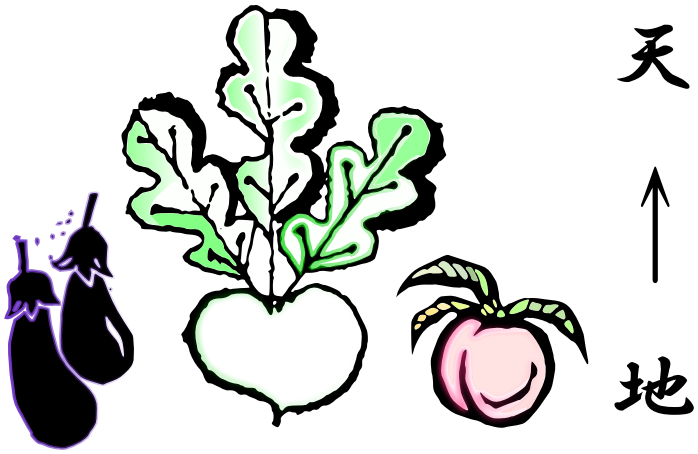
回りて向かう ～供養のあれこれ～

・仏教の中の向きと数



仏事に関連した『向き』や『数』についてのご質問をよく受けます。

例えば葬儀や法事の御仏前でのお参りの時、焼香は何回なのか？線香は何本か？また、御仏壇を新調されてお部屋に据え置く時の向きについてや、お墓の並び等々・・・。畏れるべき対象であるからこそ、あれこれと思案が尽きず、また巷に溢れる言説や風習の違いなどにより、いったいどうすればいいのか判断に迷うことが多々あるものです。

結論から申しますと、広義の仏教に於いては前出の疑問も含め、『向き』『数』に関してのこだわりや忌避は一切ありません。

しかし、現実の焼香の場面などで僧侶や年配の家長からチクっと諫められた経験を持つ方は多いと思います。では何故そのような矛盾が起きるのか？それは各宗派の開祖や中興の高僧達がそれぞれに用いた『布教の工夫』とも言うべきものをあくまでも尊ぶ故の結果なのです。

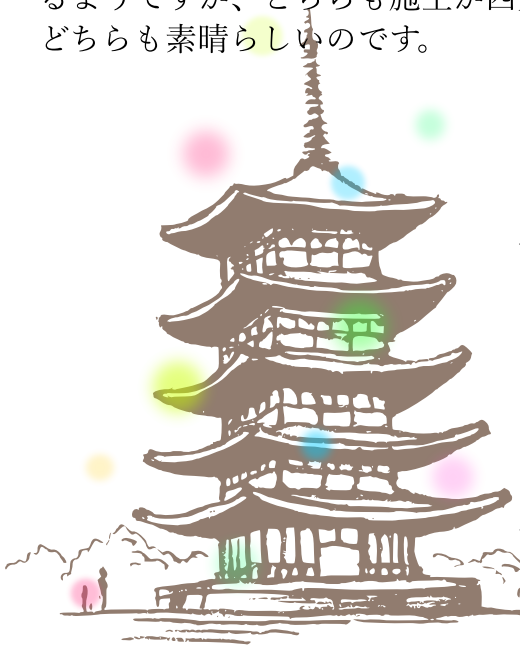
まず、『数』について述べると、そもそも今から２０００年以上前、お釈迦様が入寂されて数百年になる頃の仏教は、如何に悟りに近づくかという実践的な方法論をあれこれと列挙し、それを丸暗記して更に議論を深めるというものでした。

そうすると例えば、３と言えば仏・法・僧、４と言えば生・老・病・死、６と言えば六道輪廻というふうに私が知る限りでも、１から１０のそれぞれに洩れなく様々な仏教思想を当てはめています。日本人は特に４や９を死と苦に関連づけてしまう傾向がありますが、本来の仏教では四聖諦（４つの聖なる真理）、九品往生（阿弥陀仏が持つ九つの救済方法）などが古くから日本の僧侶にも認識されていたのであり、とくに忌むべき数字というわけではなかったのです。

むしろ、焼香の回数や線香の本数など仏教徒の日常儀礼に、それらの分類的な仏教学を結び付けることにより、難しい解釈や列挙主義の煩雑性を飛び越え、一般の人々にも高度な意識付けを促そうと、各宗派が趣意を凝らし教理を深め、やがて伝統となり今日に至っているのです。

次に『向き』についてですが、大乗仏教には東西南北を八方に分け、それに上方下方を合わせた十方の世界を想定し、そのそれぞれに無数の諸仏を配当し、その諸仏がめいめいに過去現在未来に渡って説法をしているとする壮大な宇宙観があります。

したがって西に向かえば阿弥陀仏が、東に行けば阿閦（アシュク）仏が、南海には補陀落（フダラク）浄土、北から出れば聖者の道が・・・、というふうに東西南北それぞれに優劣はないのです。また、仮に御仏壇を西向きに置くとすれば、ご先祖様の位牌が阿弥陀さんの世界を向くということになり、反対に西を背にして置くとすれば、我々が西方の阿弥陀さんに向かい、また位牌に向かうことになります。これらは相対するようですが、どちらも施主が西方極楽浄土を意識してご先祖様の事を想いやってのことですから、どちらも素晴らしいのです。



ただ一点、お供え物の天地の向きについては、我が宗派では他宗よりうるさく言われております。

このページの一番上のイラストにも在りますように、果物や野菜をお供えする際、可能な限りそれらが実際に畑で実っている状態で仏前に供えるようにと、私も指導を受けました。イチゴなどはそのようにするのが無理ですが、よくミカンや柿はヘタを下にしてお供えされていますが、出来うるならばヘタを上にしていただけたらよろしいかと思います。

左の五重の塔のように、日本の寺院建築や伝統美術の中にはたくさんの様々な『数』や、敢えてそうしているという『向き』が、その最初に込められた理由が忘れ去られても尚、言葉無き先達として我々を導いてくれています。所作の理由を知り得ずとも、佛祖先人の智慧の道を我々は辿っているのです。